

令和元年6月25日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03899

研究課題名(和文) 大学・研究機関の国際化と研究者の流動性：個人の移動経験とその評価を中心に

研究課題名(英文) Globalization of universities and research institutes: Individual experiences and their assesment

研究代表者

酒井 千絵 (Sakai, Chie)

関西大学・社会学部・准教授

研究者番号：30510680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：国内で完結する傾向が強かった日本の大学・研究機関は、2000年代以降「国際化」の競争にさらされてきた。たとえば英語による講義や留学生、海外で学位を取得した研究者の増加、国際学会での報告や外国語での論文発表が国際化の指標とされてきている。他方で、依然として日本語が主要な言語であること、日本への留学生の大半は中国などアジア出身であることなど、政策と実態の間にはずれがあった。留学経験者や研究者への聞き取り、他国での取り組みとの国際比較を通して、日本で研究活動を行う研究者や学生が求める施策、現状を反映した国際交流、日本を留学の目的地とするアジア出身の学生にとって日本の研究機関が持つ魅力を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本の大学における国際化・グローバル化に向けた取り組みの観察、海外での学位取得者や留学生の経験の聞き取り、そして現在の日本の大学で英語を用いる授業の実施や研究者の国際的な研究体制を支援する具体的な取り組みへの参加と観察を総合的に行った。収集したデータを用い、現代日本の高等教育の取り組みがもつ問題点を明確なものとした。また国際学会に参加し、日本の現状等の共通点と相違を検討した。これらの資料を基に、日本の研究機関が今後国際的な存在感を高めるとともに、その中で研究を行う人々が国際化する学術的な関わりの中で、よりよい研究をすすめ、交流する方策を示すという社会的意義が認められる。

研究成果の概要(英文)：This study examines the globalization of academic institutions and universities in contemporary Japan. In Japan, education and academic activities have been conducted in the local language (Japanese); however, under the pressure of globalization, the government have required universities to be more internationalized. For example, universities need more courses open to students who use English as a medium of education, and increase foreign students and faculty members who earned their academic degree abroad. Using interviews of Japanese academics who had studied abroad and Chinese students in Japan and observation of cases of academic institutions in other countries, this study discusses how Japanese academia should exchange research and opinions with other countries.

研究分野：社会学

キーワード：国際化 グローバル化 高等教育 ジェンダー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進む現代社会において、大学における研究及び教育もまた例外ではない。研究開始当初は、それまで日本国内で完結する傾向が強かった大学・研究機関を「国際化」する必要が盛んに論じられた時期であった。たとえば、欧米の研究機関だけでなく、アジア域内の大学との比較においても相対的に順位を下げていた日本の研究機関の国際ランキングを上昇させるという議論が行われた。また若年人口の減少を背景とする留学生を30万人まで増加させるという目標もたてられた。こうした目的を達成する手段として、英語による学位取得を可能にすることや、英語など外国語を用いた国際学会での報告や論文の発表が高く評価されるようになっていった。

だがその反面で、日本の研究機関は依然として日本語を主な運用言語としており、多くの研究者は国内での学位取得や研究活動を主としてきた。特に人文・社会科学系の分野では、特にこのような傾向が強い。英語での講義を増加させるという目標も、学生と教員の双方にとって負担が大きい。また留学生は30万人に向けて順調に増加したが、その多くは英語が教育言語ではない国・地域の出身である。このように、日本の教育研究機関は実態とのズレを認識しながら、「国際化」の道を模索してきた。

2. 研究の目的

本研究は、大学や研究機関の国際化を、国内外の文化・教育政策や経済関係をはじめとするマクロな背景と関連付けるとともに、この変化を経験しながら、留学や研究活動によって国境を越えて移動し、自らのキャリアを構築していく個人の選択を明らかにすることを目的として行った。

3. 研究の方法

研究は以下の3つの方法を用いて行った。

1つ目は、国境を越えて移動する研究者や学生に対するライフストーリーの聞き取りである。本研究では、日本から海外へ留学し、学位を取得した日本人研究者と、日本に国外から留学してきている留学生に聞き取りを行った。また大学・研究機関に勤める研究者とは異なるが、日本の教育機関で学んだ後、自分の意志で海外(中国)へ移住し、キャリアを積んでいる日本人に対するライフストーリーの聞き取りも行った。

2つ目は、インターネット調査会社を利用して行った、日本からの留学経験者に対する質問紙調査である。高等教育の受け手である「学生や、かつて教育をうけてきた成人市民が、留学経験を経て現在の大学・研究機関の国際化をどのように評価し、何を求めているのかを理解することが調査の目的であった。

3つ目は、国内外の大学における国際化の試みや、国際学会の開催等の場におけるフィールドワークである。たとえば、国際化を進めるための教職員に対する英語教育セッション、国際シンポジウムでの国外研究者の受け入れや個々の研究者が担う役割、研究の国際化に対する意識やプレッシャーなどについて、随時聞き取りを行った。

4. 研究成果

4年間の研究成果は以下の通りである。

まず、大学における国際化・グローバル化に向けた取り組みを観察し、資料を収集した。特に、英語を用いる授業の実施や研究者の国際的な研究体制を支援する具体的な取り組みについて、聞き取りを行うとともに、実際にその取り組みに参加し、参与観察を行った。また、主に中国からの大学及び大学院への留学生に対して聞き取り調査を行い、日本への留学を決断した経緯や留学生活に対する評価、卒業後のキャリア展望について情報を収集した。これについては、現時点でまだ論文化にはいたっておらず、今後発表に向けて準備を行う。

これらの調査を通して、国際化・グローバル化に向け、現在の日本における教育行政の取り組みがもつ問題点を明確にするためのデータを収集することができた。たとえば、英語を共通語とするグローバルな研究体制の中で日本の高等教育が持つ地位を上げていくことをめざす一方で、日本人学生を主体とする大学学部教育では、その取り組みに呼応していく学生が一部にとどまっていること、英語圏からの留学生も一定数含まれる短期留学・交換留学と、東アジアの非英語圏からの留学生とが混在していることなどの矛盾を含むことが明らかになった。

研究期間には、国際学会・ワークショップに計6回参加することができ、その中で教育や研究のグローバル化について発表する機会を持つと同時に、多くの国の研究機関が共有する国際化へのプレッシャーとこれに対する対応、学会への報告者や参加者が持つ国際化への認識の相違を検討することができた。オーストラリア(2016年)、オーストラリア(2017年)、カナダ(2018年)と比較し、アジアに位置する韓国(2015年)、中国(2018年)、シンガポール(2019年)での研究機関の国際化を観察するなかで、アメリカやヨーロッパを目指すべきモデルとして取り上げるだけでなく、アジア地域の事例が持つ重要性が明らかになった。研究を国際化することは多くの国・地域が共有する重要な問題だが、主な使用言語や国内の高等教育の規模によって、国際化の意味には相違もある。シンガポールや香港に代表されるアジア域内のグローバル都市では、研究言語を英語に統一する(あるいは英語を重視する)研究機関が、主に英語圏で学位を取得した若い研究者をポスドクとして採用しており、彼らにとって研究継続のための魅力的な場

となると同時に、国際的な研究中心としての評価を固めていた。他方、中国や日本は、依然としてローカル言語による研究と教育が重要な意味を持ち、特に人文社会系では、英語での研究遂行や報告は補完的な位置づけにとどまっている。人的な移動・交流については、特に日本と中国との関係は深い。日本に留学して学ぶ中国からの学生に加え、中国で学ぶ日本人や研究・教育活動に当たる日本人研究者への聞き取りは、英語を軸に成り立つ研究ネットワークと併存する、アジア圏での研究交流のあり方を示唆するものであった。この点についても、現在論文化をすすめている。

日本の大学の多くは2000年代以降グローバル化を目標として掲げているが、英語による授業は依然として一部にとどまっており、教務・事務についても英語への対応はまだ十分進んでいるとは言えない。同時に、日本で学ぶ留学生の多くは中国を中心とするアジア圏の出身であり、英語を教育言語とすることが現状留学生への支援の意味を持ち得ない。他方で、調査期間中にすすめた日本で学ぶ中国人留学生への聞き取りのなかで、日本を留学先として選択した理由を問うと、日本の大衆文化への関心をあげる者が一定数いると同時に、中国国内で人気を集める留学先は欧米英語圏であり、日本は学費の手頃さ、英語力が不十分であることなどの理由から選択したという者が多くを占める。今後、日本は留学生にとって魅力的な場となりうるのか、政治経済的な状況が変化すれば日本は選択肢から外れてしまうのかという問題について、今後の大学政策は敏感になる必要があることも明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) 酒井千絵 (2018)「移動する人々のライフストーリーとグローバル化する「アジア」の変容：香港・上海就職ブームという対象から」『関西大学社会学部紀要』50(1), pp.25-47. 査読なし
- (2) 酒井千絵 (2017)「誰が子どもの世話をするのか—シンガポール映画「イロイロ」に見る家事労働と女性」『子どもの虐待とネグレクト』第19巻第1号(通巻第49号) pp. 66-71. 査読なし
- (3) 酒井千絵 (2016)「書評：加藤恵津子・久木元真吾著『グローバル人材とは誰か：若者の海外経験の意味を問う』」『日本労働研究雑誌』58(11) pp.83-86. 査読なし

〔学会発表〕(計5件)

- (1) Chie Sakai, Family as a buffer between multicultural individuals and single citizenship nations: Cross-border marriages between Japan and China, MARRIAGE MIGRATION, FAMILY AND CITIZENSHIP IN ASIA, Asia Research Institute, National University of Singapore. 2019/1/31-2/1
- (2) Chie Sakai, Japanese Expatriates in China Since the 1990s: Gender, Nationalism, and the Changing Status as a Migrant, the XIX ISA World Congress of Sociology, 2018/7/19
- (3) Chie Sakai, Experiencing Changing Relations Between Japan and China: Case studies of Japanese women in Hong Kong and Shanghai, The Women in Asia Conference in Perth. 2017/9/29
- (4) Chie Sakai, Social Actions Against Ethnic and Cultural Conflicts in Diversified Communities, 3rd International Forum of Sociology, Vienna, 2016/7/10.
- (5) Chie Sakai, "Mothers of Japanese-Chinese households: Women's Roles in Multinational Families in Shanghai", CU-MRI 2015 International Conference: Homo Nomad, The Dilemma and Tasks for Social Integration, at Catholic University of Deagu. 2015/6/4

〔図書〕(計3件)

- (1) 石井香世子(編)(2017)『国際社会学入門』ナカニシヤ出版。(酒井千絵「第2章 移民と国民の境界：現代の国際移動をどうとらえるか」) pp. 13-21
- (2) Chie Sakai (2016) "Unintentional Cross-cultural Families: The Diverse Community of Japanese Wives in Shanghai", in Sari K. Ishii ed., Marriage Migration in Asia: Emerging Minorities at the Frontiers of Nation-States, NUS Press (Pte) Ltd. pp.43-72.
- (3) 酒井千絵・永井良和・間淵領吾編『基礎社会学』世界思想社(酒井千絵「第18章 国境を越える人々」 pp.227-240.)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。